

撰受を行ずる時は僧と成りて正法を弘持す。

問うて曰く、仏の記文は云何。答えて曰く、「後の五百歳、閻浮提に於て広宣流布せん」。天台大師記して云く、「後の五百歳、遠く妙道に沾わん」。妙楽記して云く、「末法の初め冥利無きにあらず」。伝教

大師云く、「正・像稍過ぎおひりて、末法太だ近きに有り」等云云。「末法太だ近きに有り」の釈は、我が

時は正しき時に非ずと云う意なり。伝教大師、日本にして末法の始めを記して云く、「代を語れば像の終

り末の初め、地を尋ぬれば唐の東羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生鬪諍の時なり。経に云く、猶多

怨嫉、況滅度後と。此の言良に以有るなり」と。此の釈に「鬪諍の時」と云云。今の自界叛逆・西海

侵逼の二難を指すなり。此の時、地涌千界出現して本門の釈尊の脇土と為り、一閻浮提第一の本尊此の

国に立つべし。月支・震旦未だ此の本尊有さず。日本国には上宮、四天王寺を建立するに未だ時来らざ

れば阿弥陀他方を以て本尊と為す。聖武天王、東大寺を建立するも花嚴経の教主なり。未だ法花経の

実義を顕さず。伝教大師粗法花経の実義を顕示す。然りと雖も時未だ来らざるの故に、東方の鵝王を建

立して本門の四菩薩を顕さず。所詮地涌千界の為に此を譲り与うるが故なり。此の菩薩仏勅を蒙りて近

く大地の下に在り。正・像に未だ出現せず。末法にも又出で来らずんば大妄語の居士なり。三仏の未来

記も亦泡沫に同じ。此を以て之を惟うに、正・像に無き大地震・大彗星等出来す。此等は金翅鳥・修

羅・竜神等の動変に非ず。偏に四大菩薩出現せしむべき先兆なるか。天台云く、「雨の猛きを見て竜の

大なるを知り、花の盛りなるを見て池の深きを知る」等云云。妙楽云く、「智人は起を知り、蛇は自ら蛇

を識る」等云云。天晴れぬれば地明らかなり。法花を識る者は世法を得べきか。一念三千を識らざる者には、仏大慈悲を起し、五字の内に此の珠を褻み、末代幼稚の頸に懸けしめたまう。四大菩薩の此の人を守護したまわんこと、大公・周公の文王を撰扶し、四皓が恵帝に侍奉せしに異ならざる者なり。

文永十年 太才卯月二十五日  
癸酉

日蓮 之を註す

## 観心本尊抄副状

文永十年（一二七三）四月二十六日。五十二歳。於佐渡一谷。富木常忍宛。  
二紙完 中山法華経寺藏。（定七二二頁 原漢文）

帷 一・墨三長・筆五卷給び候い了んぬ。

観心の法門少々之を注し、太田殿・教信御房等に奉る。此の事日蓮当身の大事なり。之を秘して無二の志を見ば、之を開拓せらるべきか。此の書は難多くして答少なし。未聞の事なれば、人の耳目之を驚動すべきか。設他見に及ぶとも、三人四人座を並べて之を読むこと勿れ。仏滅後二千二百二十余年、未だ此の書の心有らず。国難を顧みず、五々百歳を期して之を演説す。乞い願わくは一見を歴て来るの輩、師弟共に靈山浄土に詣でて、三仏の顔貌を拝見したてまつらん。恐々謹言。

文永十年 太才卯月廿六日  
癸酉

日蓮 花押

富木殿御返事